

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	藤野 哲朗
論文担当者	主査 木島 貴志
	副査 黒田 悦史
	副査 都築 建三
学位論文名	Association between house renovation during pregnancy and wheezing in the first year of Life: The Japan environment and children's study (妊娠中の自宅の増改築と生まれた子どもの生後1歳までの喘鳴・反復性 喘鳴の発症頻度との関連)
「子どもの健康と環境に関する全国調査（以下、エコチル調査）」は、胎児期から小児期にかけての児の健康に影響を与える環境要因を明らかにすることを目的に、2010 年度より全国で約 10 万組の親子を対象として行われている大規模かつ長期出生コホート調査で、本学も兵庫ユニットセンターとして参加している。喘息の発症には生後のウイルス感染や受動喫煙など様々な要因に加え、妊娠中の居住環境も影響することが報告されている。しかし、妊娠中の環境因子と生後の児の喘息や喘鳴の発症との関係についての検討は十分ではない。 申請者らは、エコチル調査に登録され、質問票に有効な回答があった 75,731 名に対して、妊娠中の新築・増改築と生後 1 歳での喘鳴および反復性喘鳴（4 回以上の繰り返す喘鳴と定義）との関連について検討した。母親の喫煙歴・アレルギー歴・社会経済背景、児の性別・アレルギー歴・呼吸器感染症の既往などを共変量としてロジスティック回帰分析を用い統計解析した。また、母親のアレルギー既往、児の呼吸器感染症既往の有無で層別化し追加解析した。結果、妊娠中に増改築をした群では、増改築をしなかった群に比べて生後 1 歳までの喘鳴と反復性喘鳴の頻度が高く（喘鳴 OR : 1.33, 95% CI: 1.20-1.48、反復性喘鳴 OR: 1.22, 95% CI: 1.00-1.48）、妊娠中の新築と喘鳴の頻度に関連がない（OR: 0.98, 95% CI: 0.90-1.06）ことが判明した。層別化解析では、母親のアレルギー既往の有無に関わらず、妊娠中に増改築をした群で児の喘鳴の頻度が高かった。（既往あり OR: 1.25, 95% CI: 1.08-1.44、既往なし OR: 1.44, 95% CI: 1.23-1.68）。また、児の呼吸器感染症既往の有無に関わらず、妊娠中に増改築をした群で児の喘鳴の頻度が高かった（既往あり OR: 1.18, 95% CI: 1.02-1.36、既往なし OR: 1.51, 95% CI: 1.30-1.75）。 以上、妊娠中の増改築が、生まれた児の 1 歳までの喘鳴・反復性喘鳴の頻度増加に関連すること、および、母親のアレルギーや児の呼吸器感染症の既往という喘鳴発症のリスク因子として報告されている要因の有無に関わらず、児の喘鳴の頻度増加に関連することが明らかとなった。 本研究の成果は乳児喘鳴の発症予防や機序の解明の一助となることが期待され、学位授与に値するものと判断した。	